

今しか飲めない味

東京都江東区 安東美香 (37)

朝を迎えたら珈琲が飲みたい。これは私の長年の習慣だ。インスタントコーヒーの粉をマグカップに入れお湯を注ぐ。けれど、そのほんの数秒の間に娘が泣き出して、今日も淹れたての珈琲を諦めるしかない。

今、娘は一歳過ぎの甘えたい盛りで片時も離れられない。離れようものなら大泣きしてしまう。その泣き声はもはや絶叫だ。小鳥のような口に毬のようなお腹をしているのに、この小さな体の一体どこからこれだけの声量が出てくるのだろう。近所迷惑になるのを恐れ、私はすぐさま娘のもとに駆け寄る。娘をなだめ、ようやく泣き止めれば次は遊び相手になる。その後は、オムツ替えと離乳食をして公園へ。買い物を済ませて帰宅すると、娘の相手をしながら掃除、洗濯、食事の用意と家事のフルコース。

キッチンにぼつんと置かれている珈琲を思い出すのは、娘が昼寝をした時か夫が帰宅してからだ。香りもコクも失われてきつい酸味が舌に刺さり、まずいとしか言えない。

昔は自分で豆を挽き、ペーパーフィルターから一滴ずつ滲み出てきた淹れたての珈琲を飲んでいた。まるやかで香しい熱々の珈琲がもたらす喜びは心も体も温めてくれて、私のささやかな楽しみと癒しだった。

けれど、強烈な酸味のまじり珈琲は今しか飲めない味。私は今日もこの珈琲を飲みながら、娘を授かったことや健やかに成長してくれていることに感謝し幸せを感じる。娘が一日中ママを求める時期はいずれ終わる日がくる。そう考えたら、寂しい気持ちになると共に、自分が限られた貴重な毎日を送っていることに気が付いた。ママ、ママと両手を大きく広げて全身で抱っこを求めてくる娘をたくさんたくさん抱きしめていたい。

人生には驚くことがあるというけれど、まずい珈琲を飲みながら幸せを感じる日が来るとは、人生は面白いものだ。